

には險阻な岩石が長く、連つて、一夫之に當れば萬夫も通り能はぬ様な要害の地であつたから、外敵に襲はれる憂もなく、安心して月日を送られた。其間に彼等は律法を授けられるやら、色々訓戒されるやらして、稍組織立つた國民となり、今では約束の地の征服に出掛けられぬこともなさうに思はれて来た。然しそれには差當り軍事上の編制が必要なので、モイゼは神の命を畏り、二十歳以上の男子の数を調査した。左にその表を掲げて置く、第二表はそれから三十八年後、いよく約束の地に討入る少し前に行はれた調査の結果である。

第一表

ルベン	四六五〇〇
シメオン	五九三〇〇
ガド	四五六五〇
ユダ	七四六〇〇
イサカル	五四四〇〇
ザブロン	五七四〇〇
エフライム	四〇五〇〇
マナツセ	三二二〇〇
ベンヤミン	三五四〇〇
ダン	六二七〇〇
アセル	四一五〇〇
ネフタリ	五三四〇〇
合計	六〇三五五〇

第二表

ルベン	四三七三〇
シメオン	二二二〇〇
ガド	四〇五〇〇
ユダ	七六五〇〇
イサカル	六四三〇〇
ザブロン	六〇五〇〇
エフライム	三二五〇〇
マナツセ	五二七〇〇
ベンヤミン	四五六〇〇
ダン	六四四〇〇
アセル	五三四〇〇
ネフタリ	四五四〇〇
合計	六〇一七三〇

無論これは概数を擧げたものに相違ないが、第二表は第一表からするに千八百二十名を減じて居る。長い旅行、非常な困苦、缺乏、天罰なきを考慮に入れるに、それは寧ろ當然である。尤もイサカル、ベンヤミン、アセル、マナツセ、ユダの五族は増加を示し、他の七族は減じて居るが、中にも甚しいのはガド、ネフタリ、シメオン、エフライムの五族である。最も優勢なのはユダ族で、特に勢力を失墜したのはシメオン族である。レウイ族は兵役を免除されて居たので、その調査も別に行はれた、第一回の調査には二万二千人で、第二回には二万三千人を數へて居る。

イスラエル人はシナイ山を發足する前に第二回の過越祭を執行した。エトロの子、モイゼの義兄弟になるマヂアン族のホバブ(Hobab)は發足少し前までイスラエル人の間に居たが、いよく發足する段になると俄に歸國するに云ひ出した。モイゼはイスラエル人を行を共にして、神の祝福に與る様に勧めた。ホバブも一應は拒絶したもの、モイゼが強ひて勧めたら終に頭を縦に掉つた。彼は荒野の遊牧者で、この界限の地理、飲料水、住民の状況を詳しく知り抜いて居たので、モイゼの爲には得難い案内者であつたのである。

(2) 發足—さて二年目の二月(今の陰曆四月)二十日に雲が聖幕屋を離れたので、民は急に天幕を巻き、北を指して發足した。

その途筋は判然しないが、先づシナイ山脈の西側を東北に進んでアカバ灣の西岸に出て、それからア

ラバの廣い谷を北進し、やがてはその谷を離れて西を指し、行程十一日にしてカデス・バルネ (Cades-Barne) に到達した(一三三)

シナイ山からカデス・バルネまではファランの荒野(Pharan)に云ひ、石灰岩の臺地で、水草に乏しく、人烟は稀に、所々の谷間にやつぎ飲料水が湧いて居るに云ふ鹽梅、それこそ實に荒涼たる不毛の地である。民は長く休養した揚句に、そんな處を歩かされたものだから、物の三日も行くに、體は疲れるし、咽は渴くし、もう黙つて居れなくなり、そろ／＼不平を鳴し苦情を陳べ出した。するに不思議な火が飛んで来て、營の端を焼いたので、民は恐れてモイゼの助力を求めた。モイゼが主に嘆願するに、火はそのまゝ鎮つた。この事であつた爲め、其所はタベラ (Taberah—火災) と呼ばれた。

(3) 怒心の墓—それから進んで行く中に、今度はイスラエル人に附いてエジプトを出た密集りの連中が泣音を出して、

「あゝ誰か私等に肉を食べさしてくれないだらうか。エジプトに居る時は、魚でも、胡瓜でも、西瓜でも、韭、葱、青蒜でも意のままに食べられたのに、ここにはマンナの外に何にもない」

と口説き立てた。するにイスラエル人までが夫れに曳かされ、子供見た様に、肉が食べたいの、胡瓜や西瓜が欲しいの、と大聲に泣き叫んで仕方がない。流石のモイゼも困り果て、神に自分の窮状を訴へ、一人でこの總ての民を托せられては、さても遣りきれない、餘りに荷が重過ぎる。むしろ自分の命を引取

つて斯んな難儀を見せないで下さいましと嘆願した。主は彼の願を聞き入れ、顧問としてイスラエルの長老の中から七十人を選び、聖幕屋の前に携へ行いて祝福を受けしめよと命じ、猶民の望に従ひ、肉を食べさせる、それも一日や二日や十日や二十日でない、一ヶ月の間も鼻から出るまで、飽き果てて了ふくらるに食べさして遣すとお約束になつた。

モイゼは仰の如く七十人の長老を選び、之を聖幕屋の前に案内するに、彼等は忽ち聖靈に充されて預言をなした。茲に云ふ預言は未來を告げることではなく、超自然的奪魂の妙境に入り、神を讚美するの謂である。其事を聞いてモイゼの従者のヨズエは主人の威光がそれだけ薄れるにでも思つたものか、「命じて差止めなさい」とモイゼに言つた。然しモイゼはそんなに胸の狭い人ではない。「お前はさうして私の爲に嫉妬を起すのぢや、願はくはヤウエの民が皆預言をなし、ヤウエが彼等にその靈を降し給うて欲しいものではないか」と云つた。

神は第二の約束もお果しになつた、數限りもない鶉の群が風に送られて、海の彼方から飛んで来て地上に落ちた。營の四方一日路ばかりの間と云ふものは、一面に高さ二肘ばかりの鶉の山を築いた、民は争つて之を拾つた、其日も、其夜も、その翌日も終日之を拾ひ、食べ餘した分は天幕の外にならべて干物にした。一番少く拾つたものでも、十一二石を下らなかつたに云ふ。然しその肉がまだ齒の間に在る中、即ちその貯へた肉を食し終らぬ中に天罰を蒙り、死するものが多かつた。餘りに食べ過ぎて疫

刺を起し、バタ／＼と仕れたものであらう。爲に此處はキプロト・ハツタアラ(Quibroth Hattarah—慾心の墓)と呼ばれた。

(4) マリアとアアロンの嫉妬—進んでハセロト(Haseroth)に云ふ所へ着いた。ハセロトは「圍ひ」を云ふ意味で、多分敵人や、野獸の侵入を防ぐため、四方に石を疊み、荆棘を横へ、「圍ひ」を繞らして野營をした所から、そんな名をつけたものであらうか。

ハセロトに居る時、モイゼに取つて何よりも痛嘆すべき事件が、しかも同胞のマリアとアアロンの爲に突發した。民數紀(二)にはその原因をモイゼがエチオピアの婦人を娶つたのに在りましてある。然しモイゼもあらうものが、神の誠に反して異教の婦人を娶るはずもなければ、少し前、まだシナイ山下に居る時、妻のセフォラが訪ねて来て居る所から以て見るに、エチオピアの婦人は、多分マリアとアアロンがこのマヂアン出のセフォラを嘲つて呼んだものであらう。セフォラが来るや、モイゼの之に信賴するに甚だ厚く、家事萬端を切り廻さした爲、マリアは嫉妬を起し、アアロンを煽つて、

「モイゼばかりにヤウエはお話しにならない。我々にも同じくお話し下さつたじやないか」

と云つて、不平を鳴したものと思はれる。なるほぎマリアは女預言者と呼ばれ(出エジプト)、アアロンは「モイゼの口」(同上四)になつたものではあるが、然しそれはモイゼの下にあつて、そんな任務に當つた迄のことで、それを楯にしてモイゼを排斥するなんて、實に沙汰の限りを謂はなければならぬ。

モイゼは至極温和な人であつたから、然う言はれてもぢつと堪へて何とも言はなかつた。然し神はそのまゝ聞き流して置くべきでないと思召され、二人の如き普通の預言者もモイゼとの間には雲泥の違が存することを諭して、嚴しくお咎めになつた。煽動者たるマリアはてきめんに天罰を蒙つて、癩病に侵され、その身は雪の如く白けて來た。二人はびつくりして痛悔の胸を打ちつゝモイゼの助力を求めた。よつてモイゼが「主よ、彼を癒し給へ」と祈るに、主はその祈を聞き入れ、癩病者にたいする規則に従ひ、「七日間、營の外に引離し置くべし」と命じ給うた、その爲にイスラエル人は餘儀なくも一週間ここに滞在した。

(5) カデス・バルネーイスラエル人はハセロトを發し、北へ北へ進んで終にカデス・バルネ(Cades-Barne)に着いた。此處はコドルラホモルがシナイ半島を掠め廻つた時はアイン・ミスファト(Ain Misphat)に稱し、ネゲブ(Negeb)の南、アザジメ(Azazimeh)臺地の西傾斜面に位せるアイン・ガデイス(Ain Gadsis)らしく、石灰岩の下から大きな泉が湧き、寂莫たる荒野に、目も醒めんばかりのオアシスを作つて居る。(6) 斥候—此處からカナアンまでは程近いので、モイゼは神の仰を畏まり、十二族から一人づつを選抜いてカナアンの地へ遣し、土地の様子を探らせた。彼等は四十日もかゝつて南から北へシカナアンの地を隈なく見廻つた。歸りがけにはヘブロンに近いエスコル(Escol)の邊で大きな葡萄の一房を切り取り二人がかりで荷つて來た。してその葡萄を民に見せながら、



「實に立派な土地じや、乳と蜜の流れる云ふのも嘘ではない。けれど町は大きい。城壁も堅固で、住民は非常に強く、軀幹は馬鹿に長大い。我々を傍に持つて行くに、宛然と見えたやうだ」  
と言つて民に怖氣を起さした。たゞエフライム族のヨズエミユダ族のカレブだけは民を勵まして、「なあに進んで取るさ、怖れる事はないよ」言つたけれど、他の十人が「迎も迎も我々の力の及ぶ所でない」云ふものだから、民は夫れに欺かれ、終夜泣き叫んで何も手の附けようがない。

「あゝエジプトで死んで居たら可かつた。寧ろこの荒野でも死んだが優しよ。何うぞそんな地へは連て行かれたくないものだ。身は刃物に斃れ、妻子は捕虜にされたら何うする？ 一層の事、今からエジプトへ歸らう。別に首領を立てエジプトへ歸らうぢやないか」

ここまで言ひだした。モイゼミアアロンが「ヤウエに信頼め、恐れるに及ばぬ」勸めて見たけれど、何時かな聽容れない。二人は民の眼前で地上に平伏して主の御憐れを求めた。ヨズエミカレブの兩人も悲んで衣を裂き、聲を勵まして、

「我々の見廻つた土地は實に立派なものだ、ヤウエは必ず我々を助けて、彼の乳と蜜の流れる國をお與へ下さる。ヤウエに叛いては可けない。住民が何うあらうに、何の怖れる所がある？。彼等には天の救護が無い。ヤウエは我々と共に居つて下さる。何にも怖れる譯はないではないか」

と言つて、頻りに彼等の氣を引立てようとした。然し臆病神に取りつかれた彼等は、二人の道理ある言に耳を傾けないのみか、大聲を擧げて噪ぎ立て、二人を石殺にしようとした。忽ち神の光榮が聖幕屋の上

に顯れ、モイゼに向つて、  
「この民は何時まで我を誹るのだ。彼れ程の奇蹟を行つて見せたのに、何時まで我を信じないのだ。もういよく疫病を降して、彼等を滅ぼし盡して、汝をもつて大きい、もつて強い民の首領になさう」  
と仰せられた。然れどもモイゼが主の盡きせぬ御憐れに訴へて偏に御赦を願ふに、主も終に宥つて疫病を降すことだけは止して下さつた。でも斯んなに奴隷根性が抜けないで、少しの困難にも堪へ得ない様では、迎もカナアンの征服は覺束ないと思召されてか、モイゼミアアロンに斯う民に告げよと命ぜられた。

「我はイスラエルの子女の咄きを聽いた。汝等の言の我耳に入つた通りに致すであらう。ヨズエミカレブを除き、二十歳以上のもので、我に向つて咄いたものは、我が誓ひし地へ入ることは出来ない、皆死骸をこの荒野に横へるのだ。たゞ汝等が敵の捕虜になつてはならぬと言つたその子供だけを引入れ

て、汝等の好かない土地を見せるであらう。彼の地を見廻はるのに四十日を費したから、一日を一年と見積つて四十年の間、汝等は、この荒野に彷徨つて、自分の罪を負ひ、その罰を受けるのだ。アマレク人にカナアン人が附近の谷に住んで居るから、明日は天幕を捲いて荒野へ歸れ」

ミ。そして十人の斥候は、民を煽動してヤウエに叛かした廉を以て、即座に天罰を受けて死んだ。民は面白からぬ宣告を受けて急に心が變り、「悪うございました、今はもうヤウエの仰しやる所ならば何處へでも行きます」と言ひ、朝早く起きて山の頂に登りかけた。モイゼが「なぜ主の仰に逆はうとするのです。登つては可けない。主が附添つて下さらぬから、敵に打負ける計りですよ」言ふのも聽かないで山に駆け上り、ネゲブ地方に進撃した。然し契約の櫃もモイゼも動かなくなつたので、自分等ばかりで何うすることも出来よう筈がない。果してアマレク人、カナアン人に攻め立てられて、散々に敗北し、敵に追撃されてホルマ(Horma)まで逃げ歸つた。是に於て已を得ず再びモイゼに従ひ、ファランの荒野に退き、四十年の間、様々の難儀を見て、軀を鍛ひ心を練つて、カナアンに攻入る準備をしたのである。

數回折角紅海を渡り、エジプトの奴隷を遁して戴いた彼等も、重ね々々の過失によりて、到頭約束の地へ這入ることは出来なくなつた。我々も同じで洗禮の水を渡り、悪魔の奴隷を免れることは出来て居るにせよ、現世の荒野を旅行する間に、神に逆ひ、その御攝理を咥き、罪を犯しては、逆も約束の天國へ這入れるものではない。

## 第二十九章 ファランの荒野

(一)ファランの荒野—イスラエル人は反逆の罪により、約束の地へ這入り得ないで、三十八年間もファランの荒野に彷徨ひ、その間にエジプトを出る時、丁年(二十歳)に達して居たものは大抵死に果て、了つた。然し二百万人からの大衆が何を食つて、そんな荒野に生活し得たのであらうか。

ファランの荒野は、今日アラビヤ人がテイ(Tih)放浪の荒野と呼んで居る所だ、東は死海の南からアカバ灣(エラト灣)に至るアラバの低地に境し、西はスル(Sur)の荒野に接し、南はテイ山(Djebel et-Tih)に限られ、北はカナアンの南境に迫れる廣い大きな臺地で、谷間に清水が湧いて、タマリシや合歡木の茂れるオアシスも有るには有るが、一般に云ふに、水に乏しく、常に乾燥しきつて居る。水を得るには低地に小さな井を掘りて、汲み上げるより外はない。然し雨期になるに、草が俄に萌え、盛に成長するので、枯草は澤山ある。野營をする時、燃料もなれば、家畜の飼料にも十分役に立つ云ふ、間々耕作に適せる地さへ無いではない。

そしてイスラエル人は何時もく同じ所に密集して居た譯ではない。聖幕屋の守護はレウイ族に托けて、カデスに置いて居たかも知らぬが、他族は水や草のある所を尋ねて廣く四方に散在し、牧畜をやつ



て居たものでまらう。ちやうどあの邊はメソポタミア、アラビア地方からエジプトへ往來する陸路の通路に當つて居たので、彼等と交易をして必要な日用品は容易に求めることも出来た。況んやパンの代りには毎日マンナを降して戴けるし、さまで生活に困る様な事はなかつた筈である。たゞ時として何かの便宜上、他へ引越さうとする時、水も湧かず草も生れない岩根の路を辿らねばならぬことになること、忽ち不平を溢し、苦情を陳べてモイゼミアアロンを困らせるのであつた。

(2) コレ、ダタン、アピロンの叛逆—ファランの荒野に放浪へる間にイスラエル人は十七回ほど移動したかの如く民數紀には書いてある(三九・三三)。然しその地名が今の何處に當るのやら判定が出来ない。それも全イスラエル民が移動したのか、或は前にも言つた如く、一部のものが居を變へたのみに過ぎなかつたか、はつきりした事は言はれない。たゞその間にあつた重大な出来事をかい摘んで記すことにする。

是は放浪初年にあつたことであるが、一人のイスラエル人が安息日に薪を拾つて居る現場を押へられた。嚴しい禁令を犯したので、その男はモイゼミアアロンの前に突き出された。安息日を破つた者は死刑に處するに云ふことだけは、規定してあつたけれども、如何なる刑罰を加ふべきか云ふことは明らかにされてなかつた。よつて二人は主に伺ひを立てるに、石殺にせよ云ふお答を得たので、早速その通りに決行して、法の曲ぐべからざる所以を明にした。然しこれは一些事云へば一些事で、もつゝ重大な出来事はコレ、ダタン、アピロンの叛逆であつた。

コレ(Core)はレウイ人で、モイゼの従弟に當るのであつたが、アアロンの司祭職を奪はうと思ひ、ルベン族からダタン(Dathan)、アビロン(Ahiron)、ホン(Hon)の三人を語らひ、他に二百五十人云ふ大勢を味方に抱き込んで、モイゼミアアロンに反抗を試みた。ルベン族は長男でありながら、長男の権利を認められなかつた不平から、容易にコレの叛逆に與みしたものと思はれる。

「汝等も大抵よい加減にしろ、會衆は皆聖なのだ。神様がその中に在して首領となつて下さる。なぜ民の首領になつて大きな顔をするんだ」

こんな横柄千萬なことを言つて二人を斥け、自分等が取つて代らうとした。今日でも教會に反對する連中は、善くコレの口吻を真似て、自己の野心を隠さうとするものだ。人間の心は西も東も昔も今も變つた所がない。モイゼは夫れを聞いて大に悲み、地に平伏して主の御助力を求め、さてコレ一味の人々に云つた。

「主は誰が御自分に屬するものであるか、そのお選び遊ばしたものは誰であるかをお知らせ下さいませう。で斯ういたしなさい。明朝みな香爐を取つて火を入れ、其上に香を盛つて主の御前に立ちなさい、その時主がお選び遊ばした人こそ聖なる者です。まあ善くお聞きなさい、主が貴方等(重)にコレ及びレウイ族の人を指す)を民衆の中から選抜いて御自分に近かせ、聖幕屋の勤務をさして下さいますのは大したお恵ぢやありませんか。未だ其上に司祭職までも横領したいのですか。皆して主に

逆ふ考(さか)らなんですか。アアロンが何なら彼に向つて咥くのです」

「斯う云つて嚴しくその不心得を責めたけれども、彼等は一向悔い改める模様がない。夫れからモイゼは人を遣してダタンミアビロンを呼び寄せたが二人は斷然拒絶した。

「いや行かない、何だ、貴様は我々を殺さうと思つて、乳と蜜の流れる地(主の御言を逆にしてエジプトを指して斯う曰つたのである)からこの荒野に連れ出して來て居ながら、夫れでも足らずにして、猶その上に我々の首領にならうと云ふのか、實際乳と蜜の流れる國に引き入れて、田畑も葡萄園も與へてくれたのか、さあ我々が見ない様に眼球でも抉り出さうと云ふ了簡なのか、いや決して行かない」

「ご答へて動かない。翌朝コレに二百五十名の同類は手にく香爐を携へて聖幕屋の門に立ち、モイゼもアアロンに香爐を持たして其處に立出た。忽ちヤウエはその眩ゆき光榮を顯して、モイゼミアアロンに「會衆を離れよ、立ちに滅して了ふから」ご命じ給うた。然しモイゼミアアロンが「一人の罪の爲に皆を滅しなさいですか」ご平伏して嘆願いたすに、「ではコレ、アビロンの天幕を遠かる様、民に命ぜよ」ご重ねて仰せられた。時にコレは二百五十名ご聖幕屋の門に立つて居て、民ご一緒ではなかつたので、其方は可しとして、モイゼは直ちにダタンミアビロンの天幕の前へ行き、人々を戒めて、「この悪人の天幕に遠かれ、彼等の物に觸れるな、同じ罪に巻き込まれてはならぬぞ」ご曰つて、其周圍を立ち退かした。でも二人は妻子ご天幕の入口に突立つて、飽まで反抗の氣勢を見せて居る。モイゼは彼等に



向つて、  
 「お前等が人並に死ぬ様なことがあつたら、  
 私は神様から遣されて居ませんよ。然れども  
 若し地が大口を擧げて、お前等もお前等  
 の所有物も残らず呑み込んで了つたらば、  
 夫れこそお前等が神様を漬した證據だと思  
 ひなさい」  
 と言ひ終るや、忽ち彼等の足下が裂けて、天  
 幕もろ共生きながら地の底に埋まつて了つた。  
 夫れと同時に主の尊前から不思議な火が出て  
 來て香を燻らして居たコレ及び同類二百五十  
 人を忽ち焚殺した。神はモイゼミアアロンに  
 命じ、コレ等が携へて居た香爐を展板として  
 祭壇を包む爲に用ゐ、以て後の人の戒みな  
 さしめ給うた。

(3) 民の不平—斯んな怖ろしい例を眼前に見せつけられては、  
 反逆なき云ふことは思ひも寄らぬ筈であ  
 るのに、性も懲りもない民ばかりは何んとも致方がない。  
 翌日モイゼミアアロンに向ひ、「汝等がヤウ  
 エの民を殺したのだ」ミ狂ひ蒐り、又復大騒ぎをやり出した。  
 モイゼミアアロンは例によつて聖幕屋に  
 驅け込んだ。するさ雲は聖幕屋を立て罩め、ヤウエはその眩  
 き光榮の中から二人に「この民衆の中を立退  
 け、今に滅して了ふから」ミ仰しやつたけれども、二人は平伏  
 して御憐を祈つて止まない。然し重ね  
 づの反逆にヤウエも愛想を盡して、二人が一心から願ふにも  
 拘らず、怖ろしい天罰を降されたので、  
 死者が續々出て來た。モイゼはアアロンに向ひ、  
 「香爐を取つて、祭壇の火を入れ、上に香を盛り、民の方へ  
 行つて彼等の爲に祈れ、ヤウエのお怒が發  
 して疫病が流行り出した、早く〜」

ミ急ぎ立てた。アアロンが民衆の中に走せ行つて、死者ミ生者  
 の間に立つて祈るミ、疫病はケロリミ止  
 んだ。でもこの日死んだ者は一萬四千七百人の多きに上つた。

ヤウエは以後この様な反逆が起らない様にして置きたいミ思召  
 されて、「十二族の長に各々一本の  
 杖を出させ、夫々に本人の名を記し、レウイ族からはアア  
 ロンの杖を出して聖幕屋の中に置け、我が大  
 司祭に選んだ者の杖は芽を出すから」ミモイゼに命ぜられた。  
 モイゼが仰通りに致して、翌朝聖幕屋に  
 入つて見るミ、アアロンの杖だけが、立派に芽を吹いて蕾を出し、  
 花を開いて、巴旦杏の實を結んで居



た。斯うなつては、もう誰一人反對を唱へ得よう筈がない、アアロンはいよいよヤウエに選ばれた大司祭を確定したのだ。斯くて主は今度の反逆に民が懲りくして、二度も斯る不平を鳴さない爲、モイゼに命じて、アアロンの杖を契約の櫃の中に納めしめ給うた。

(4)モイゼの疑——四十年に亘れる荒野旅行も終りに近いて、イスラエルの民は再びカデスに集合した。モイゼの姉のマリアは其處で亡き人の數に入つた。

カデスは飲料水の豊富な地であつたが、さうした譯か今度その飲料水が不足して、民は大に困難した。主に嘆願すれば何でもないので、然うはしないでモイゼミアアロンに迫り、

「何故我々をエジプトからこんな拙らない土地へ連れ込んだのです。耕されもせぬ、無花果も出来ぬ、葡萄も柘榴も實らぬ、飲料水さへないぢやないか」

モイゼは騒ぎ立てた。モイゼミアアロンは會衆の前を去り、聖幕屋の門に至りて平伏した。するも主の光榮が彼等に顯れ、モイゼに告げて曰うた、

「汝杖を取り、汝の兄弟アアロンと共に民を集め、その眼前で岩に命ぜよ、岩の中より水を出すであらう。斯くて汝は岩より水を出して、民こそ家畜に飲ましむべし」云。

然し重ねく民に苦情を陳べられて、流石のモイゼも氣がくさくさなつて來たを見、岩の前に立ち立つたが、主の仰せのままには致さないで、

「聽け、汝等反逆、不信の兒等よ、我々もこの岩から水を汝等の爲に出し得ようか」

モイゼは云つて岩を二度まで打つた。モイゼ程の聖人であるから、決して主の全能を疑つた譯ではあるまい。たゞこんな始終咬いて居る民に水が與へられるだらうか幾分か躊躇して、たゞ岩に命すれば可いのに、之を打つた、しかも二度までも打つたのである。水は忽ちサラサラと流れ出た。然し主はモイゼミアアロンの仕打をお喜びにならない。

「汝等は我を信ぜず、イスラエルの前に我光榮を貶せしにより、この民を導いて約束の地へ入ることは出来まいぞ」

モイゼは御宣告になつた。輕微の罪の様ではあるが、二人の地位が高かつた丈に、嚴しい處罰を蒙つたのである。

(5)アアロンの死とアラドの襲撃——モイゼは是からいよいよカナアンの地へ攻め入らうとしたが、カデスからアラバの低地に出で、それを北に進むと、直に死海の南へ出られる。路も險阻でなく、しかも近い。たゞこの地はエドム人の國境に屬して居るので、之を通過するには、先づ彼等の承諾を得なければならぬ。エドム人はエザウの子孫で、イスラエル人は元々血を分けた兄弟である。よつてモイゼはカデスから使者をエドム王の許へ遣して、

「汝の兄弟イスラエル、年久しくエジプトに居たが、今やエジプトを出て汝の境の端なるカデスに居る。

願はくは汝の國を通過せしめ給へ。我等は田畑をも葡萄園をも通るまい。井の水さへ飲むまい。ただ王の路を通るのみで、境を出るまでは右にも左にも偏らない、若し水を飲むこゝがあらば、必ずその價を拂ふ」

ミ相談に及んだれども、エドム王は聞き容れない、大軍を率ゐて行手の路を遮つた。エドムミ戦ふな、ミ神に差止られて居たので、モイゼは已むを得ず、他の路を取るこゝにした。斯くて一同カデスより進んで、ホル山(Hor)の麓に着いた。神はモイゼミアアロンに宣うた。

「アアロンは此處で死なねばならぬ、我言を疑つたから、イスラエルの子孫に我が約束せし地へ入るこゝは出来ない」

ミ。よつてモイゼはアアロンミその子エレアザルを伴つてホル山に登り、アアロンにその制服を脱がせて、之をその子エレアザルに着せた。アアロンはこの山の嶺で最後の目を瞑り、モイゼミエレアザルのみ山を下つて来た。民はアアロンが死んだのを見て大に悲み、三十日間の喪を行つた。

アアロンの死んだ頃、カナアンの最南端に國せるアラド(Arad)の王はイスラエル人が自分の國へ攻め寄せて来るミ聞き、機先を制せんものミ、兵を率ゐて之を撃ち、幾何かの捕虜を獲た。イスラエル人は神の援助を祈り、もし自分等に勝利を得せしめ給はゞ、敵を屠り、その城を滅すべしミ誓つた。神は彼等の祈をお聞き容れになつた。彼等はアラドの軍を盡にし、その都城を叩き潰し、之をホルマ

(Horma) 殲滅(せんめつ)ミ呼んだ。今日セファアト(Sephath)ミ稱する古い都の跡が夫れだらう云ふこゝだ。



銅の蛇  
第二十九章 ファアランの荒野

(6) 銅の蛇—イスラエル人はホルを發して路を南に取り、エドムの國境たるセイル山脈の西側に沿うてアカバ灣頭に出で、それから踵を回して同じセイル山脈の東側を北に進まう云ふのであるから、途中の困難は言ひ様もない。民はすつかり弱り込んで了つて、又候主に向つて泣き、

「なぜ我々をエジプトから引出して来て、こんな荒野で死なせるのです。パンもない、水もない、もうマシナの様な軽い食物は飽きくした」

ミ例によつて下らぬ不平を陳べ立てるので、主は罰のため、恐ろしい毒蛇を這ひ廻らせなかつた。それに噛まれるミ激しい熱が出て、ちやうど火にでも焼かれたかの様、死ぬものが少からずあつた。民は恐れて後悔

の胸を打ちつゝモイゼの前に来て、

「ヤウエミ貴方に吐いたのは悪うございました。さうぞ祈つてこの蛇を退治して下さい」

と願ひ出た。モイゼは早速主の御憐れを祈るに、「銅の蛇を作つて棹の上に立てよ、蛇に咬まれたも

のが、それを視るに生き上る」と云ふ御返答を得たので、その通りに致した。果して蛇に咬まれて死に

かゝつた者でも、その銅の蛇を眺めるや、忽ち生き返つて来るのであつた。

⑦死海の東に出づーイスラエル人は廻り廻つて死海の東に出た。此處はロトの子孫たるモアブ人の國

であるから、神の仰に従ひ、何等の攻撃をも加へないで國の外側を迂回し、アルノン河(Annon)の手前

に達した。河を渡ればアモレ人の國である。モイゼは此處からその王セホン(Sehon)の許へ使者を遣し

て路を貸してもらひたいと申込んだ。王はその申込みに應じないのみか、兵をくり出してイスラエル人

を喰止めようとした。エドム人は血を分けた兄弟の間柄であつたので、モイゼもその鋒尖を避けて應戦

しなかつたが、アモレ人はカナアン族で、残らず討果せし命ぜられて居るのであるから、何の遠慮もい

らない。迎へ戦つてセオン王を斬り、南はアルノン河から北はヤボク河(Jaboc)までの間を悉く占領

し、都のヘスボン(Heshbon)に根據を据ゑた。

夫からイスラエル人は進んでヤボク河を渡り、同じアモレ族の割據せるバサン國(Bassan)に討入つた。

バサンの王オグ(Og)は國を擧げて防ぎ戦つたが、神の護り給ふイスラエル軍に敵し得ようはずがない。

王を始め、全軍残らず塵にされ、ヨルダン河東の地は、南はアルノン河から北はヘルモン山(Her-

mon)に至るまで悉くイスラエル人の手に落ちた。もう水もない、草もない荒野の燒砂は背後になり

青緑の廣い野原が眼前に横る様になつた。四十年の長い長い放浪の旅はいよゝ終りに近い。イス

ラエル人の胸中は如何なる喜びに躍り立つのであつたらうか。

⑧銅の蛇はイエスス・キリストの十字架の前表である。毒蛇に嚙まれた者でも一たび銅の蛇に

眼を注ぐと、立ろにその毒を消されたが如く、我等も悪魔に傷けられた時、厚い信仰を以て十字架

のイエススを打眺め、深くその御傷に信頼まば、必ずその傷を癒され得るのである。

### 参考 ホル山に就て

ホル山(Hor)とは「高い山」を意味し、死海の南からエラト灣へ連互れるセル山脈中の最高峰ハルム山(Djebel Harum)こそ夫れに相違ない。普通認められて居る。海拔千三百二十八メートル、絶頂にアフロンの墓と稱する小さな石造の家がある。

然し今日の註釋家中には、ハルム説に賛成が出来ない。云ふ人が多い。第一イスラエル人は一應カデスに集合し、其處を發足して直ぐホル山下に到達して居る(二〇ノ三)、カデスからハルムへは距離が餘りに遠く、到底一泊や二泊で行かれたものではない。

次にホル山はさうしてもネゲブの南方に位せねばならぬ、と云ふのはイスラエル人はホルへ到着し

てから、其處を發足するまでの間にアラドの王を衝突し、ホルマを叩き潰して居る。もしホル山を以てセイ山脈中のハルムとするならば、ヘブロン南二十五キロメートルの地點に都せるアラド王がそんな遠方までイスラエル人を追撃し得るはずがあらうか。之に反してイスラエル人はカデスより北進したものとすするならば、アラド王が夫れを迎撃つたことも、イスラエル人にホルマを滅されたことも、容易に説明が出来る。なほイスラエル人はホル山から南へ針路を變へたのであつたことも忘れてはならぬ(民数記二一、四)

だからホル山はカデス附近に求めなければならぬ。然し不幸にしてこの地方の山にホルミ云ふ名を持つたのがない、たゞカデスの北に位せる圓形の孤峰、マドウラ(Djebel Madurah)は申命記のモゼラ山(Mosera)(申命記二〇、六)に近いので、或はそれではあるまいか云ふことだ。(聖書)

### 第三十章 バラアムの預言

(一)バラク王の狼狽—アブラハムの甥ロトの子孫はモアブ、アンモンの二民族となり、モアブ族は死海の東、アルノン河の南に住み、アンモン族はアルノン河ミヤボク河の間に國して居たのだが、この頃に至つてアンモン族はアモレ王セホンに逐はれて東に退いた。時のモアブ王はバラク(Balac)と稱し、イスラエル人がバサン國の征服に没頭せる間にアルノン河を踰りて、この河ミネボ山との間を占領したものと思はれる。

抑もヨルダン河が死海に流れ込むあたりから少し東にフアスガ山(Phasga)と云ふのが故つて、對岸

のエリコ城と遙に相呼應し、その附近一帯の地は「モアブの平野」(民数記二〇、二)とも、「モアブの草原」(民数記二一、二)とも稱し、水量は豊富で、草木は盛に繁茂し、一種のオアシスをなして居る。イスラエル人が本營を此處に置いて、征服地の經營に従事して居るに、バラクはイスラエルの勢威に怖を抱き、公然と敵對行爲に出ることは出来ないが、さらばきて拱手傍觀もして居られない、アモレ、バサンの二國は脆くも討ち滅された、自分の國でも何時さうなるか分らぬ、せめてはイスラエル軍を誼ひ、自國に害を加へ得ない様にしたものだ。斯う思つて、メソボタミアはエウフラト河ミサグル河(Sagour)との會流せる邊に位せるペトル市(Pethor)に住んで居たバラアム(Balaam)と稱する有名な占卜者を招いて、その事を委託しようと思つた。使者はバラアムの許を訪れて、

「エジプトから出て来た民がある。地の面を蔽うて我前に居る。請ふ來つて我が爲にこの民を誼つて下さい。彼等は我よりも強いのです。さう誼つて下さるに、或は之を撃破つて我國より追拂ふことも出来るか知れないから」

ミ王の依頼を申述べた。このバラアムは眞の神を知つて居ただけれども、慾に引かれて占卜なんかして居たものらしい。然し神はバラアムを戒めて、「行つてはならぬ、彼の民は祝せられたものじや、何んなことがあつても誼つてはならぬ」を仰せられた。

お金がたんまり貰へるので、バラアムも行きたくはあるが、神の仰に背いては何んな目を見ねばならぬ

かも分らない。使者を呼んで、「神様が行くなご仰しやるから、何ごも致方はありません」ご謝絶つた。使者は歸つてバラク王に右の次第を復命するご、バラクは前よりも大勢の使者を遣して「金も位も望に托して與へるから、早く来て詰つて下さい」ご頼んだ、禮金が少くてバラアムが来てくれないのだご思つたものである。バラアムは使者を見て「たごへ王様が家一杯金銀を詰め込んでお與へ下さつても、神様の御語を變へて多くも少くも申上るごは出来ません。でも折角ですから、今夜は此處にお泊りなさい、神様が何ご仰しやるか伺つて見ますから」ご答へた。然るに案外「使者ご行つても可い、たご命令通りにせい、餘計なごごを喋つてはならぬぞ」ご云ふお答があつたので、バラアムは大に喜び、翌朝、驢馬に跨つて使者ご共に出發した。

(2) 物言ふ驢馬——然れごも怒に目の無いバラアムだ、主の仰に背き、イスラエル人を誚つて、たんごバラク王の恩賞に與らうご途中で腹を極めたものらしい。主は怒つて天使を遣はし、驢馬の前に立ち塞がらせなかつた。バラアムは罪の爲に眼を眩されて居るから、何にも見なかつたが、驢馬は拔身を提げた天使の姿を見て、路を逸らして畑の中へ走り込んだ。バラアムは驢馬を無理に打叩いて路に引戻さうごしたら、今度は垣を仕廻はした二つの葡萄園の間に天使が顯れた。驢馬は夫れを見て片隅に寄り添ひ、バラアムの足を垣にこすり附けた。バラアムは自暴になつて頻りご驢馬を鞭つて進ました。するご三度目に天使は、右にも左にも外れられぬ、ほんごに狭い一筋道に立ち塞がつた。驢馬は進退谷まり、膝を折

りて其まゝ据り込んで了つた。バラアムはいよく怒つて、驢馬の脇腹をヒウ／＼ご鞭つて居るご、不思議にも驢馬が口を利いて物を言ひ出すではないか、

「私が何をしましたか、何ぞ其様に打つんです？、もう三度ですよ」

「當り前だ、俺を馬鹿にするぢやないか、劍を持つて居れば斬棄てる所だよ」

ブン／＼怒つて答へたら、驢馬もなかく馬鹿にされない。

「私は貴方の常に乗る獣じやありませんか、今まで一度でも貴方に斯んな事をした事がありますか」

ご言つた。斯う云ふ常ならぬ事があるのは、必ず其處にそれ相當な理由がなければならぬ、篤ご考へて見なさい、ご注意したのである。その時漸くバラアムの眼が開いて、拔身を提げた天使の姿を見た。バラアムは吃驚した、驢馬から飛び下りて地に平伏した。天使は厳しくバラアムを咎めて、

「なぜ驢馬を三度までも鞭つ？、汝の道は滅亡の道だ。悪い滅亡の道だ。驢馬が路を逸して我を避け

たから救かつたんだが、さもないご汝を斬り棄てる所であつた」

「悪うございました、貴方様が立ち塞がつて居らつしやるごごは些ごも存じませんでした。行くのが御氣に

召さぬのなら歸ります」

「否、歸るには及ばぬ、行け、唯だ命ぜられた事より外は言はない事にせよ」

(3) 第二の祝福——バラアムは終に行つた。モアブ王バラクは喜んで出迎へたが、直ぐ自分の招きに應じて

くれなかつたにつけて不満の意を表した。

「私は斯うして参りました。然し今は何事も自ら言ふ事は出来ません。たゞ神様が私の口にお授けになる言を宣へるだけですよ」

バラアムは豫め用心の杖をついて置いた。翌朝バラクモモアブの大臣等はバラアムを伴ひ、バモト・バアル(Bamoth-Baal)バアル神の高き所)と言ふ山に登つた。此處から南バレスチナは一目に眺めるこゝ出来るが、イスラエルの陣營は高い山に遮られて、たゞ端の方が少し見ゆるだけに過ぎない。バラアムに全景を眺めさせて、イスラエルに對する好感を與へてはならぬと思ひ、わざと此處を選んだものであらうか。

バラアムは七つの祭壇を設けさせ、牡牛七頭、牡羊七頭を犠牲に供へ、それからバラクモモアブの大臣等を祭壇の傍に残し置いて、獨り小高い所に登り、神の御言を承つて之を彼等に傳へた。日は

「バラクは我をアラム(タソボ)より下らした——モアブの王は我を東國の山々より下らした。

來れ、我が爲にヤコブを誑へ——來れ、我が爲にイスラエルに向つて憤れ、

我神の誑ひ給はざるものを如何で誑はう。——神の憤り給はざるものを如何で憤らう。

巖の頂より我之を見、——丘の高きより我之を望む。

この民は獨り離れて住み——萬の民の中に列る事がない。

誰かヤコブの塵を數へ——イスラエルの四分の一の數を言ひ得よう。

願はくは是等の義人の如く我も死にたい——我が終焉も彼等の夫れの如くあつて欲しいものだ。」

(4) 第二の祝福——バラクは聞いて且つ驚き且つ怒つた。

「君は何を私に爲したんです。君を招いたのは敵を誑はせる爲なのに、君は却つて祝して居るのだな」

「でもヤウエが私の口に授け給うたこゝのみを慎んで宣ふべきではありませんか」

ミバラアムは答へた。よつてバラクは彼を伴ひ、イスラエルの陣營が全部ではないが、大部分よく見ゆるファスガ山(Phasga)の頂に登り、例によつて七つの祭壇を築き、壇毎に牡牛一頭、牡羊一頭を献じた。バラアムは一寸彼等を離れて神の思召を伺ひ、その御告を傳へた。

「バラクよ、起つて聽け——チボル(Tippor)の子よ、耳を假せ、

神は人の如く偽るこゝなく——人の子の如く悔ゆるこゝなし、

その言ふ所は之を爲さないだらうか——その宣言せし所は之を果さないだらうか、

我は祝福せよと命ぜられた——神之を祝福し給へば、我その祝福を變へるこゝ出来ない。

ヤウエはヤコブの中に惡しきこゝを見せ——イスラエルの中に不義を見たまはぬ。

主なるヤウエ彼等と共に在し——彼等の王として喝采を受け給ふ。

神は彼等をエジプトより出し給うた——その強きこゝの呪の如し。

ヤコブには魔法なし——イスラエルには占あらず。

神は彼等の間になすべき事を、その時、その時にヤコブに告げ——イスラエルに示し給ふ。

視よ、この民は牝獅子の如く起き——牝獅子の如く起き上る。

その獲物を食はでは——その傷いたもの、血を飲までは臥すこゝあるまい」

(5) 第三の祝福——バラクも今やバラアムにイスラエル人を誑はせるこゝが到底不可能と悟つて、「誑は

ぬのなら、せめては祝さないで下さい」を頼んだ。バラアムに嚴正中立を守らせようとしたのである。

然しバラアムは相變らず、「私はヤウエの宣ふこゝを總て爲ざるを得ない、前以て告げ置いたではあ

りませんか」を答へて彼の頼みに應ずる様子がない。然しバラクに取つては國家の安危、存亡に係る一

大事である。さうしてもこの儘にして置かれぬ。よつてバラアムを携へて、ネボ山(Nebo)の西に當

るフォゴル(Phogor)の絶頂に登つた。此處はイスラエルの陣營に最も近く、その全景を眼下に見卸す

事が出来る。バラアムは例の如く犠牲を備へさせたが、もう神の思召はイスラエルを祝するに在るこゝ

が分つて居るので、それを伺ひにも行かなかつた。そして突然神の靈に感じて、第三の神託を告げた。

「ヤコブよ、汝の天幕は如何に美しきよ——イスラエルよ、汝の住所は如何に美事なるよ。

ヤウエの植ゑし沈香樹の如く——水の邊の檜樹の如し。

その桶より水溢れ——その種子は豊かな水に繁殖されよう。

その王はアガグ(マア)より高くなり——その國は振ひ興るであらう。

神は之をエジプトより導き出した——その強きこゝの呪の如く、

その仇なる國々の民を呑みつくし、その骨を挫き——矢も之を射透すであらう。

牝獅子の如く身を屈め——牝獅子の如く臥して居る。——誰か敢へて之を起し得よう、

汝を祝する者は祝され——汝を誑ふ者は誑はれよう」

今度ばかりはバラクも堪り兼ねてブン／＼怒り出した、

「君を招いたのは敵を誑はせる爲だつたのに、君は却つて三度までも祝した。もう用がない、國へ歸

り給へ。報酬もたんに取らせるはずだつたけれど、ヤウエが邪魔を入れたんだから仕方がないよ」

「それは前以てお使ひの方々に申して置いたでせう。たゞへ金銀を家一杯詰めてお與へ下さつても、

ヤウエの仰ぎほりしか申されません。では歸りますが、その前に一言申添へて置きます」

「私は之を見て居るが今ではない——私は之を眺めて居るが近くではない。

ヤコブより一の星が出で——イスラエルより一個の笏が起る。

彼モアブを此方からも彼方からも撃ち——喧嘩の子等を悉く滅す。  
彼エドムを我有とし——その敵たるセイルを我有とする。

イスラエルはその勢力を伸し——ヤコブより主権者出て——城より遁れ出る者を滅すであらう」  
世界の大王たる救主がイスラエルより出で給ふべきことを預言したのである。

それからバラアムはイスラエル人を最初めに攻撃したアマレク人や、マヂアンの一支族たるキネ人  
(Kinens)の滅亡を告げた上で、自國の衰亡をも預言した。

「あゝ神が之を爲し給はん時——誰が生存し得よう、

キツチムの方より船が来て、——アツスルを攻め惱まし、

ヘベルをも攻め惱ますべし——しかして是もまた終に亡び失せるであらう」

キツチムはキブルス島のこゝだが、またこの島より以西の國々を廣く指すこゝがある。アツスルはヘ  
ベルは共にアツシリアを意味し、一時は強勢な國であつたが、終にはカルデアに滅され、その跡に立つ  
た國も西から来たギリシア、ローマの爲に併呑され、バラアムの預言は成就した。

要するにバラアムの預言は、イスラエルの將來、地中海の東西に興亡をくりかへすべき諸國の運命、メ  
ツシアの世界的王國云ふ様に、それこそ廣漠な範圍に亘れるもので、後世の預言者はたゞ彼が描いた  
輪廓を鮮明にしたのみに過ぎなかつた。

(6) バラアムの入智慧——バラアムミバラクは互に袂を分つた。バラアムはヤウエの命に従ひ、その神  
感のまに——イスラエルを祝した。然しそれは自分の本意に出たのではない。しかもその爲に折角の恩  
賞も棒に振らねばならぬこゝになつたかと思ふに、遺憾千萬だ。よつて故郷のベトルへは歸らないで、  
モアブの聯盟國たるマヂアンに立寄り、イスラエル人を淫蕩に導いて、その風俗を壊り、以て神の詛を  
蒙らしめるやう入智慧をした。時にイスラエル人は依然モアブの草原に滯陣して居たのだが、マヂアン  
ミモアブの婦女子等は之に近いて猥褻行爲を勧め、それから次第に彼等を誘つて、マヂアンの偶像バ  
ル・フェゴル (Baal-Phegor) を祀らせた。

固よりさう云ふ罪惡に陥つたのは、全イスラエルではなく、その中の少數に止つたのであるが、それ  
にしても天罰は恐ろしかつた。モイゼは民の長老等を集めて、公然バアルを祀つた者は容赦なく斬り棄  
てよと命じた。神もまた激烈な疫病を下し給うたので、死者が續出し、その數實に二万四千人の多きに  
上つた。民も漸く迷ひの眼を醒し、後悔の涙を飲んで居る所に、シメオン族の長老ジムリは公衆の前を  
も憚らず、マヂアンの婦人を引張つて来て、之を天幕の中に入つた。大司祭エレザルの子で、アアロ  
ンの孫に當るフィネエス (Phinees) 之を見るや、餘りのこゝに勝も九廻する思がしてならぬ。早速槍  
を提げて、ジムリの天幕に推入り、たつた一突きに二人を串刺にして殺した。主は彼の熱誠を喜ばれ、  
忽ち疫病を終熄させ、彼の子孫が長く大司祭の職を奉じて失ふまじきお約束になつた。



さてこの不祥事を來せし原因はマヂアン族にバラアムにであつたから、神はモイゼにマヂアンの討滅を命じ給うた。よつてモイゼは一万二千の大軍(二千づつ)を繰り出して、マヂアン族の大部分を鑿にし、その財物を分捕り、バラアムをも斬つて棄てた。

敬訓—バラアムの如く金錢の慾に引かれて、悪智慧をつけたり、人の心を腐敗させたりする者が、今の世には多いものだ。注意せよ。我等はむしろフィネエスの如き熱誠家になつて、罪惡を攻撃し、主の御怒を宥め奉り、以て人の上に降りかゝれる禍を遠ける様、心掛けねばならぬ。

第三十一章 モイゼの遺言とその永眠

(一)モイゼの最後の事業—モイゼは是まで攻め取つたヨルダン河東の地をルベン、ガドの二族にマナツセ族の半に與へた。たゞカナアンの地を征服し終るまでは、他の兄弟に力を併せて、攻城野戰に従事すべきことを彼等に約束させた。

次にモイゼは民を集めて三回の大演説をなした。第一回の演説(申命記一〇六)をしたのはエジプトを出てから四十年目の十一月一日で、神がシナイ山に於てイスラエルの民に契約を結び給うてより、彼等に施し給ひし數知れぬ恩恵をかい摘んで物語り、ヤウエは斯くまで寛仁大度な慈父にて在す以上、飽まで之に忠誠を盡し、その律法を守りて、渝る處あるべからずと、くれぐれも説き勧めた。

第二回の演説(申命記二九)は最も長く、又最も重要で、十誠を始め、その他の律法をくりかへし、不十分な點は之を補足し、いよく切實に之が遵奉を勧めた。

「イスラエルよ、聽け、汝心を盡し、精神を盡し、力を盡して汝の神ヤウエを愛すべし。今日我が汝に命ずる是等の言は、汝を心にあらしめ、務めて汝の子孫に教へ、家に坐する時も、路を歩む時も、寢る時も、起きる時も、之を語るべし。汝また之を汝の手に結びて記號しなし、汝の目の間に置きて記憶しなし、又汝の家の柱に汝の門に書記すべし」(申命記一〇六)

第三回の演説(申命記三〇)は簡單にして、しかも意義深長である。カナアンの地を征服してから、契約の更新を舉行すべきこと、律法に忠誠なることによりて、嚴重な賞罰の加へらるべきことを述べ居る。

是等の演説には、出エジプト記、レウイ記、民數紀等に載せてある律法をくりかへすばかりでなく、往々その要點を摘んである。司祭、レウイ人、聖所等に關する規定には一言も觸れてないが、他には新規定を添へ、史實を加へた所も少くはない。何れも思想の崇高なるに連れて文辭も莊重を極め、預言書の夫れに劣らず、滔々少の淀みもなく流れて居る。しかのみならず神の誠命をくりかへす毎に、痛切な勸告を加へてあるが、その勸告たるや、一種の優味を帯びて居るかと思へば、また嚴烈で、威嚇的な所もあり、しかも切實にしてきびくも生動して居る。

是までお役所式に發布された律法も今や賢明なる説法師、經驗に長けし友人、至仁至愛なる慈父の口を以て引用、解説された様なものだ。聴く者の心に如何なる印象を刻むのであつたらうか。始めてシナイ山の麓に於て契約の取換はされてから、早や四十年、當時、彼の驚天動地の一大出来事を目撃せし人々は人抵死に果て、現存者はまだその頃までほんの少年で、その意義も十分に汲み取り得ないのであつた。所で律法こそその律法の遵奉はイスラエル民族の死活に關する大問題であるから、モイゼは神感を蒙り、之をかい摘んで彼等に授け、永く忘れざらしめようとしたのである。

(2)モイゼの預言—モイゼはイスラエルの民の偶像崇拜に傾き易い性質を知つて居たので、彼等が異邦人と交らず、その征服すべきカナアン人の迷信行爲に倣はず、邪法を行ひ、禁厭をなし、魔法を遣ふものに事を尋ね、その言ふことを聴かない様に注意した。然らば誰に行つてヤウエの思召を伺ふべきであらうか、民に問はれぬ先から眼を遠く、將來に注意し、

「汝の神ヤウエ、汝の中、汝の兄弟の中より我が如き一個の預言者を汝の爲に興し給ふであらう。汝等之に聽くべし」

と言つた。この預言者は世界の救主キリストを指すのであつたことは、ユデア人の一般に信ぜし所、又新約聖書(ヨハネ一、四五、五、四六)を以て見ても明である。是こそ實に世界の全人類をエジプトの奴隸よりも遙に苦しい罪の奴隸より救ふべきはすのものである。是こそ浮世の荒野に放浪せる己が兒等に新たな

律法を與へて之を導き、天來のマンナを與へて之を養ひ、己が鮮血を與へてその渴を醫すもの、是こそモイゼの如く、神と罪人との仲介者となり、その手を天に舉げて御憐を祈るのである。我身を十字架に磔けて、その兄弟の罪を贖ひ、彼等が地獄の蛇に咬まれしその傷を癒すのはモイゼ以上だ。モイゼ以上に神と親しく交り、たゞに神の人たるのみならず、また實に神人—神にして人にて在すイエズス・キリストである。

(3)モイゼの歌—モイゼは、自分が主の御言を疑つた罰で、約束の地へ這入れないことを承知して、ヨズエを召出し、民の前で之を自分の後任者と立て、

「心を強くし且つ勇め、ヤウエ自ら汝に先ちて行き給ふであらう。又汝と共に居り、汝を離れず、汝を棄て給ふまい。懼るゝ勿れ、驚くなかれ」

と勵ました。なほ律法を書き終つて、之をレウイの子孫たる司祭、及びイスラエルの長老等に授け、「七年毎に、即ち安息年の幕屋祭に當つて、男、女、子供までも悉く集めて之を讀み聽かせよ。さすれば彼等もヤウエを畏れ、この律法の言を守り行ふであらう。又彼等の子等の之を知らざる者も聞いて、汝等の神ヤウエを畏れることを學ぶであらう、汝等、ヨルダン河を涉つて獲る所の地に存ふる間常にかく爲すべし」

と命じた。モイゼはイスラエル民の將來を慮り、神にたいして忠誠の念を失はせない様、それはく

周到な注意を拂つたのであるが、神はそれでも猶以て足れりとし給はず、頑なこの民は必ず異教の邪神に迷ひ、自分の誠を忘れ、爲に種々の禍や惱みに沈むであらうが、斯る際に思ひ當る所があり、己が忘恩の證ともなるやうに、歌を作つて彼等に教へ、之を記憶に留めて、口に誦へしめよ、ミ命じ給うた。モイゼは仰を畏つて、左の如き歌を作つた。

「天よ、耳を傾けよ、我語らん、——地よ、我口の言を聴け。

我教は雨の結ぶが如く——我言は露の滴るが如く、

細雨の草の上に於けるが如く——水滴の芝の上に於けるが如くあらん。

我はヤウエの御名を稱へん——我等の神に汝等光榮を歸し奉れ」

このきびくした冒頭に續いて歌の主題を掲げてある。

「ヤウエは巖に在して、その御業は完し、——そのすべての道は正し、

眞實の神にして、一の悪しき所もなし——正しくして直く在す。

ヤウエに向ひて悪しきことを爲し者、その子供にあらすして、——その汚れなり、

邪曲にして——腐れし人の世なり」

次にイスラエルの民に浴せられし主の恩恵を數へ上げる。

「汝等ヤウエに報ゆるこゝ斯の如きか——愚にして、智慧なき民よ、

彼は汝の父にして汝を贖ひ——汝を造り、汝を形造り給ひしにあらすや。

汝昔の日を覺ゆ——過ぎにし世々の年を念へ。

汝の父に問へ、彼汝に説明せん——老年に問へ、彼等汝に語らん。

至高き者、人の子を四方へ散し——萬の民にその産業を與へし時、

イスラエルの子等の數に照して——諸の民の境を定め給へり。

實にヤウエの分前はその民なり、——ヤコブはその産業なり。

彼之を荒野の地に——野獸の吼ゆる荒野に見出し、

之を抱擁き、之を防衛り——之をその眼の瞳の如く保護し給へり。

鷲その巢を見守り——その雛の上に舞ひ上るが如く、

ヤウエもその羽を展べて之を載せ——その翼を以て之を負ひ給へり……

ヤウエは彼に石の中より蜜を——磐の中より油を吸はしめ、

牛の乳、羊の乳——及び小麦の最佳きものを之に食せしめ給へり。」

斯る仁恵にたいしてイスラエルの民は何を報いたか。

「然るにイスラエルは肥れて荒々しくなり——汝は肥わたり、大きくなれり。

己を造り給ひし神を棄て——己が救ひの岩をも輕じたり。

彼等は別神もて、之が(ヤウエ)妬を起し——憎むべきことをなして、之が怒を招けり。彼等が犠牲を献ぐるは神ならざる惡魔——嘗て識らざりし神、

近頃出て來りし新しきもの——汝等の遠つ親の畏まざりし所のものなり。

汝を生みし者をは汝は之を等閑にせり——汝を造りし神をば汝は之を忘れたり。

ヤウエ之を見て、その男子、女子を怒りて之を棄て給ふ……即ち曰はく——我面を彼等に隠さん、

我彼等の終を見ん、——彼等は邪曲なる類のものにして、眞實ならざる子等なり。

彼等は神ならざるものもて我妬を起し——虚しきものもて我を怒らしめたり。

我も民ならざるものもて彼等に妬を起さしめ——愚なる民もて彼等を怒らしむべし、

外には劍、内には恐怖ありて——若き男、若き女をも、幼兒をも、白髮の人をも滅すべし。」

結末には最も力を籠めてある。

「ヤウエ曰はく、汝等今見よ——我の外に神なし、

殺すことも、活すことも、撃つことも、癒すことも、すべて我れ之を爲す——我手より救ひ出し得る者あらず。

我天に向ひて手を舉げて曰ふ——我は永遠に活くこゝ、

我わが閃、刃を研ぎ——審判を我手に握る時は、

必ず我敵に仇を返し、——我を憎む者に返報を爲すべし、

國々の民よ、汝等ヤウエの民の爲に喜びをなせ——そはヤウエ、その僕の血の爲に返報をなし、

その敵に讐を返し——その地こそその地の汚れを除き給ふべければなり。」

(4)モイゼの祝福—モイゼはこの歌を民に授け、律法に忠實なる様、返すくも命じ、夫からヤコブが

その十二子を祝した如く、十一族にそれ々々祝福を與へた。最後に神を讚美して曰つた、

「あく正しき神の如き神は他にあることなし——天に登りて汝を助け、

雲に駕して——その威光を顯し給ふ、

彼の住所は高きに在り——下には永遠の腕あり、

汝の前より敵人を追拂ひ——打潰されよ、ミ宣ふ……

イスラエルよ、汝は幸福なり——誰か汝の如くヤウエに救はれし民があらん、

ヤウエは汝を護る楯、汝の光榮の劍なり——汝の敵は汝に詔ひ服し、汝は彼等の首を踏むべし。」

(5)モイゼの永眠—斯くてモイゼは主の御命令により、ネボ山の頂に登つた。主は彼に約束の國の青い山、廣い野、颯々流れるヨルダン河、きら／＼日光に輝ける地中海の波を示し、

「是はアブラハム、イザアク、ヤコブに我が誓つた地である、汝は眼下に之を眺めながらも、親しく之



ゼイモる寸望遠な地のアナカリよ頂山ボネ

に足を踏み入れることは出来ないのだ」  
と曰うた。モイゼは主の思召に従ひ、その山の頂で永い眠に就いた。  
時に年百二十歳であつたが、その年になつても、眼も翳まず、齒も動かぬのであつた。

イスラエル人は三十日間彼の喪を行ひ、哭き哀んだ。死骸は神がお葬りになつたので、今に至るまでその墓を知るものがない。

モイゼの死後、キリストまで云ふものは、彼ほご親しく神に近き自由に神と語を交へ、驚くべき奇蹟を行つたものはなかつた。

教訓—モイゼはキリストの前表で、キリストの如く神の掟を宣べ傳へ、その驚くべき奇蹟、その預言、その徳行の光を以て自己の使命の偽りなき證明をなした。

殊にキリストの如く常に柔和、謙遜にして、如何なる無理を言はれ  
ても、じつと堪へ忍び、却つて無理を言つたその人の爲に神の御憐  
れを祈つたこと等は、千万歳の末までも仰ぐべき立派な鑑である。斯んな  
聖人でありながら、少しく氣を可立たせ、主の御言を疑つたといふ廉により、終に約束の地へ入り得な

かつたことを思ふに、罪の如何に恐るべきものたるかは察するに餘りあるであらう。

### 参考 神感に就いて

(イ)—聖書は神感によつて書かれたもの、聖霊が人の口を藉りてお話しになつたものである。随つて  
聖書の著者は神で、人はたゞ神の道具になつた迄に過ぎない。聖ペトロは詩の第六十八篇の一句に就  
き「聖霊がダウイドの口を以つて預言し給ひたる聖書は成就せざるべからず」(使徒行 一、二三)と云ひ、聖パウ  
ロは「眞なる哉、聖霊がイザヤを以つて我等が先祖に語り給ひたることや」(同上二五)と云ひ、又ヘブラ  
イ書には、エレミアの云つたことを聖霊の御言として「主曰はく、彼の日の後、我が立てんとする約  
は斯なり、我律法を彼等の心に與へ、之を其精神に録さん」(ヘブライ一、一〇、二五)と曰つて居る。なほ聖ペ  
トロは舊約聖書の預言の語をして、「神の聖人等は聖霊に感動せられて語りしものなり」(ペトロ後 一、二一)と曰  
つた。

聖書が神に出たもの云ふ使徒等の教は、其師キリストより承けたものである。キリストは詩の  
第百九篇の一句を以て、ダウイドが聖霊に由つて發したのだと斷言し、又「天地の過ぐるまでは、律  
法より一點一畫も廢らさずして悉く成就するに至るべし」(マテオ 一、二三)とも曰うてゐる。

聖書の神感とは是等の明文を以つて立派に證據だてられるのだが、然し聖書の各篇、殊に舊約聖書の  
神感になるに、聖會の權威に由らなくては到底はつきりした證明は擧げられない。ワチカン公會議は  
この事に關する聖會の教義を左の如く決定した。「是等の書籍を聖會は聖書とし、經典とする。そは  
聖霊の感動によりて書かれ、神をその著者とするからである」

(ロ)―要するに聖書は「神感によるもの」(チモテオ後)、聖書作家は「聖書に感動されて語りしもの」(ニコマ)である。今神感とか、感動とかいふのは果して如何なる性質のものであらうか。教皇レオ十三世は曰うた。「聖霊は超自然的能力を以て、彼等(作家)を書く爲に奮起させ、且つ動かす、彼等が書く時、その自ら命じ給ふ事を残らず、又そののみを心に思ひつき、忠實に書き、適當に、誤り能はぬ眞理を以て表現するやう、助け導き給ふのである。さもなければ全聖書の著者は云はれまい」云。

この言に由つて見るに、神の作家に及ぼし給ふ働は三つに約めることが出来る。(一)作家の心を動かして筆を執らしめること、(二)作家の智慧を照らして未知の事實や眞理を知らしめるか、或は既知の事實や眞理を適當に選擇して書き綴らせること、(三)書く中にその筆を導きて一切の誤謬を免れしめること。是れで、この三つの條件が揃つてこそ始めて神を以て聖書の著者云ひ得る譯である。

(ハ)―教皇が「全聖書」云はれたのは特に我等の注目に値する。聖霊の感動は聖書の各部に及ぶのであつて、たゞ信仰道徳に當る重要な部分のみならず、また歴史なり科學なりに關する部分も、聖書たる以上は、やはり聖霊の感動を以て書かれたのである。

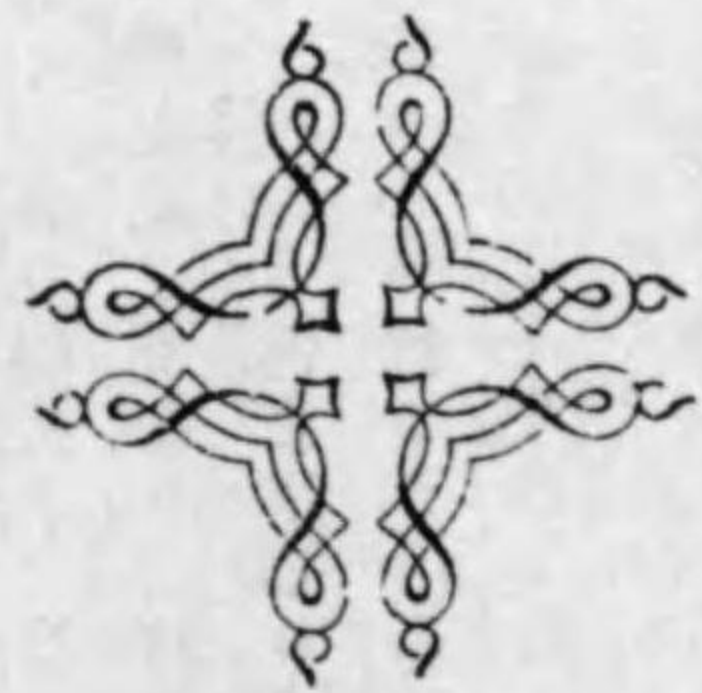
(ニ)―聖書全部が神感によつて書かれたこと云ふ所から、非常に重要な結論が導き出される。即ち宗教問題に關することでも、歴史や科學に當ることでも、確に「聖書の正文」でさへあるならば、聊の誤謬も混じらないのである。

我等は「聖書の正文」云つた。今日我等の手に在る原文や譯文には、筆生さか、譯者さかの手に出でた正文ならざる箇所が往々ある。そんな箇所には誤謬も無いではないので、聖アウグスチヌスは、それに対する法則を與へて「本書の著者は眞理を保たなかつたこと云つてはならぬ。むしろ寫本に不足があるか、譯者が誤つたか、或は君がよく理解しないかだ」云つて居る。

(ホ)―聖書は神感に成つたことは云へ、決して神のみの作ではない。聖書作家は神感を受けて筆を執つたにせよ、それは理智あり、意識あり、自由ある道具として神に使はれ、その聖霊に感動された所を自ら考へ、自ら按排して、之を文になしたのである。必ずしもちやんこお膳立をしたまゝの概念を神に授かるのではなく、自ら夫れを求め、その求めた所を適當な辭で以て表現する爲に、随分刻苦勉強せねばならぬこともあるのである。だから超自然的に神に感動、指導されることは言へ、彼等は普通の意味に於ける作家である。他の作家の如く、各自の文才、着想、その心、その魂を以て之を書き、場合に應じてそれら演説家もなれば、歴史家もなり、詩人もなる、俗の文獻を漁り、之を書き寫すところもある。神感を蒙りながらも、何から何まで知り抜いてゐるのではなく、時として多少不明瞭な書き振りを見せてゐる。例へば聖ヨハネはカナの石瓶を二三斗入りと言ひ、又ゼネザレト湖の上を四五町も漕ぎ出した時、イエズスが水の上を歩みて舟に近き給うたと言ひ、聖パウロはコリントで手から洗禮を授けたのはクリスプスミカイウス、及びステファナの一家のみで、外に誰があつたか知らない、とも言つて居る。

その他、用語や、文體や、理論の進め方や、材料の排置や等から見ても缺點を免れないからして、怪むに足りない。イエズス・キリストは神人でありながら、罪の外に人的弱さを有し給うた。聖書も神的たるに共にまた人的である、多少の人的缺點は随分あり得る。全然あられないのは誤謬だけである。

舊約史要(上)終



昭和六年三月十日印刷  
昭和六年三月二十日發行

定價 金六拾錢

長崎市南山手町乙一番地天主堂

發行者兼 浦川和三郎

長崎市榎津町七番地

印刷人 藤木喜平

長崎市榎津町七番地

印刷所 藤木博英社

長崎市本尾町七六七番地

取次販賣所 カトリック書店

長崎市南山手町乙一番地

發行所 天主堂

振替口座福岡一八二一九番

廣告

同著者の發行書目  
心 靈 修 行 (3)

同 基 督 信 者 寶 鑑

同 聖 體 訪 問

月 の 靜 修 (死の準備の黙想)

黙 想 の 葉

心霊修行中より抜粋したもの

發 行 所

長崎市大浦天主堂内、敎報社  
振替福岡一八二一九番

取次販賣所

長崎市本籠町天主堂下  
カ ト リ ッ ク 書 店

切 支 丹 の 復 活

東京市牛込區若宮町  
(前篇 定價三圓八十錢 送料各  
後篇 同 五圓五十錢 十八錢)

發 行 所

日 本 カ ト リ ッ ク 刊 行 書  
振替口社東京七四九六六

(定 價 壹 圓 二 十 錢 送 料)

(定 價 壹 圓 四 十 錢 送 料)

(定 價 六 十 錢 送 料)

(定 價 三 十 錢 送 料)

(定 價 二 十 錢 送 料)



終

